

ウルク・ワールド・システムとは何か

小泉龍人

Tatsundo KOIZUMI

Outline of the Uruk World System

西アジアの都市化あるいは国家形成の研究では、交易という視点がつねに注目されてきた。交換・交易研究そのものの先駆は黒曜石の分析にまでたどれるが、前4千年紀の社会の複雑化を対象とした交易研究は今もっとも盛んなテーマの一つとなっている。なかでも、交易がウルク文化の経済的な基盤であったと想定し、交易の役割を積極的に評価した研究として、G.アルガゼの「ウルク・ワールド・システム」論がかつて注目されていた。本稿では、著書『ウルク・ワールド・システム』で述べられた概念的説明について簡単に整理しておく(Algaze 1993, 1996)。

経緯

1990年代初頭までに、東南アナトリア、北シリア、北メソポタミアから南西イランにかけての広範囲で発掘・サーヴェイのデータが集積され、前4千年紀後半に南メソポタミアのウルク文化が周辺地域に波及していく様子が十分に知られるようになった。このウルク文化の周辺地域への波及・影響プロセスは、ウルク・エクスパンション(ウルク文化の拡大)とも呼ばれる(Algaze 1989)。しかし、多様な地域におよぶウルク文化の拡大がひとまとまりで把握されるにはいたっておらず、そこにウルク・ワールド・システムの提唱される素地があった。周辺地域へのウルク・エクスパンションに関する膨大な資料から何らかの意味を見出すためには、データ同様に広域でかつ多様性に富む柔軟な解釈モデルが必要とされた。そこで、地域文化の枠組みを越えた経済的な従属と支配の関係を軸とした「世界システム」論が注目された(Algaze 1993: 5-6)。

「世界システム」論は、I.ウォーラースtein(Wallerstein)の提唱した16世紀ヨーロッパの植民地支配についての経済モデルである。「世界システム」は、従来の国家を分析単位とする枠を越えた、全世界的に広がる経済を軸とした概念である。ウォーラースteinは、F.ブローデル(Braudel)の「経済=世界」¹⁾という歴史学的概念を基礎にしながら、社会科学モデルとして「世界システム」論を展開している。分析対象の社会的枠組みとして、「ミニシステム」、「世界帝国」、「世界=経済」という3つの体系²⁾が想定されている。「世界帝国」と「世界=経済」は帝国という政治形態があるか否かで区別され、「世界システム」は両体系に限定されるという。この全世界を取り込んでいった経済的分業システムにおいて、「中核」諸国家は「辺境」地域

を搾取の対象とし、両者の緩衝帯として「半辺境」地域が不可欠な構成要素とされる(ウォーラースtein 1981; 川北編 2001)。

J.ギャラハー(Gallagher)とR.ロビンソン(Robinson)による、直接的な政治支配なしに植民地を経済的に支配するという「インフォーマルな帝国(informal empire)」論³⁾も見据えながら、ウォーラースteinの「世界システム」論を修正して、近代国家成立よりはるか昔のウルク期に当てはめようとした大胆な試みがアルガゼのウルク・ワールド・システムであった。ただ、資本主義経済や金融制度の発達を前提とする地球規模の世界システムと、経済の仕組みがよくわかっていない古代のメソポタミアとその周辺に限定されたウルク・ワールド・システムとでは、立脚する歴史的・経済的背景や地理的景観がまったく異なる点に注意しなければならない⁴⁾。

概念

アルガゼのウルク・ワールド・システムでは、「中心」の「周辺」支配、非対称な交換、社会変化の第一要因としての交易といった点が骨格となっている。ここでは、ウルク・ワールド・システムにおけるキーワードと、空間軸や時間軸の考え方について簡単に説明しておく。

1) 「中心」と「周辺」

ウルク・ワールド・システムにおける最も重要なキーワードは「中心」と「周辺」であろう。ウルク(Uruk)を中心とする南メソポタミアと南西イランの一部が「中心」、そのほかの地域は「周辺」とされる。前4千年紀の後期銅石器時代、すなわちウルク期において、「中心」が鉱物をはじめとしたさまざまな資源を獲得するために、アナトリア、シリア、イランなどの「周辺」に段階的に拠点を設けていった。アルガゼによると、「中心」では多岐にわたる生産管理体制のもとで穀物や織物などのおもな輸出製品を生産していた。他方、資源の豊富な「周辺」は「中心」に対して常に非対称で従属の関係にあり、資源は「周辺」から「中心」へ集中するという経済的な関係にあった。そして、ウルク期の後半以降に南メソポタミアでは都市化あるいは国家形成に向けていっそう拍車がかかり、同時に周辺地域では「中心」に支配された拠点が増殖していった。前4千年紀後半のメソポタミアの社会は「周辺」の要所に配置された拠点を媒介にして必要資源を獲得し、この関係は明らかに「中

心」にとって長期の利益となつた。「中心」と「周辺」の交易は本質的に不平等で、前者で生産された製品を後者の天然資源と交換していたからである。こうした周辺地域の拠点により、十分に組織化された「中心」の政治組織は発展途上の「周辺」から最小限の労力で最大限の資源獲得が可能となつたとされる。

2) セトルメント

アルガゼによると、前4千年紀後半の「周辺」地域におけるウルク期のセトルメントは、すでに確立されていた交易路上の重要な結節点に立地する(図1)。これらは前哨地(outposts)、駐屯地(stations)、包領地(enclaves)の3タイプに分かれ、主として南メソポタミアや南西イランに共通するウルク社会の物質文化を特徴とする。ウルク文化としての考古学的アセンブレッジは、ウルク土器をはじめとして、ウルク様式の建築プラン、ウルク系の円筒印章や印影、絵文字や数字粘土板などの組み合わせからなる。前哨地はイラン高地などを横切る山間渓谷の在地系遺跡群のなかで孤立した小規模の基地であり、ゴディン・テペ(Godin Tepe)、テペ・シアルク(Tepe Sialk)などの遺跡が相当する。駐屯地は小規模な中繼地で、メソポタミア平原の主要交易路沿いに立地し、ハッセク・ホユック(Hassek Höyük)、テル・クラッヤ(Tell Qrayya)などが相当する。包領地は北メソポタミアを横断する東西陸路や河川の南北水路の交差地に立地する大規模な地方都市で

あり、アルスランテペ(Arslantepe)、ハブーバ・カビーラ(Habuba Kabira)南、ジェベル・アルーダ(Jebel Aruda)、テル・ブラク(Tell Brak)、ニネヴェ(Nineveh)などが相当する。こういった包領地、駐屯地、前哨地から成るウルク社会の交易ネットワークにより、平原部、高原部の内外に行き交う物流を強力に支配することが可能になつたとされる。

3) 段階的発展

ウルク・ワールド・システムでは、ウルク期の南メソポタミアや南西イランの一部の社会が拡大していくプロセスに4つの段階を設定している(Algaze 1993: 110-112)。まず最初の段階では、南西イラン地方のスシアナ平原部を植民地化し、南メソポタミアの中核地域の一部として包摂した。つぎに、北シリア・メソポタミア平原部で、先行する在地拠点のない地域に小集落をつくり(テル・シェイフ・ハッサン(Tell Sheikh Hassan)など)、在地の集落階層の頂点にある後期銅石器時代の拠点を占有した(ニネヴェ、ブラク、カルケミシュ(Carchemish)、サムサット(Samsat)など)。とくに後者は、水上および陸上ルートの重要な交差地であった。そして、ユーフラテス河上流のタブカ地域やカルケミシュ周辺では、都市的な方領地が建設され(ハブーバ・カビーラなど)、これら方領地はティグリス・ユーフラテス河の水上交通および北シリア・メソポタミアと南メソポタミアの間の陸上交通を効率的に支配していた。最終段

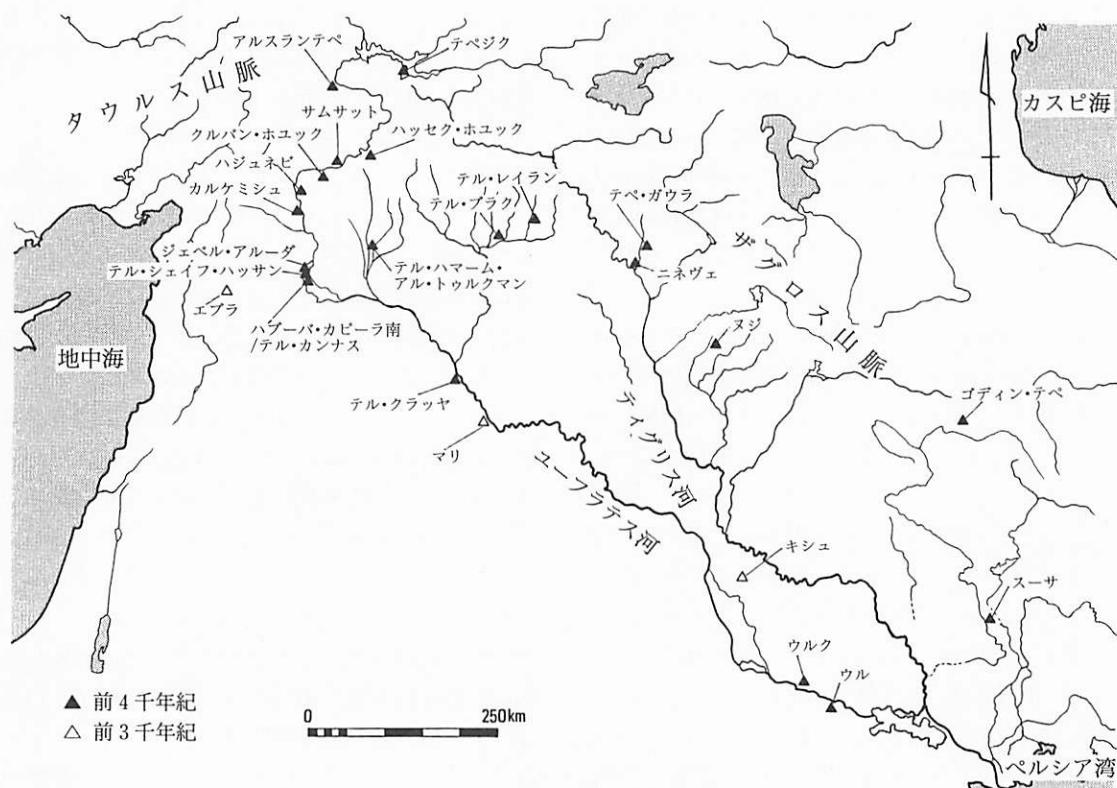


図1 本報告で扱うおもな遺跡

階には、北メソポタミアのウルク系の包領地（ニネヴェなど）あるいは南メソポタミアや南西イランのウルク後期の政治組織（アルガゼは Uruk states としている）に資源供給する高原ルート沿いの要衝に、小規模な前哨地（ゴディン・テペ、シアルクなど）が配置された。

アルガゼによると、ウルク期において南メソポタミアと南西イランの一部の「中心」が北方などの「周辺」に対して経済的優位に立っていた。ウルク期の社会システムでは、多様な「周辺」地域が「中心」へ経済的に従属し、同時に「中心」では複数の政治組織が競合するとされる。前4千年紀における地域を越えた相互影響の経済的関係は、たとえつながりが強くなくても十分に複雑なシステムであり、のちのアッカド時代に通じるとされる。やがて、「中心」で都市国家群が出現すると、政治的な競合が激しくなり、最終的にはアッカドという経済的かつ政治的に一元化された帝国が出現するにいたる（Algaze 1993: 5-6, 9-10）。

結論においてアルガゼは、「世界システム」論における「世界=経済」概念あるいは「自由貿易による帝国主義」論における「インフォーマルな帝国」概念と同様に、ウルク・ワールド・システムでは経済的関係こそが同時代の多様な地域・文化間の主要なつながりであるとする。他方、ウルク・ワールド・システムは「インフォーマルな帝国」概念とは異なり、「中心」において複数の政治組織が競合する動態をも取り込むモデルであるとしている。ウォーラースteinによって提唱された近代世界における多様な地域によぶ相互交流システムは、地域的な対抗国家からのさまざまな動きや脅威への対応として、激しく競合するいくつかの中核国家の独歩のいとなみから発生したとしている。こうした社会システム概念は、ウルク・エクスパンションにも史的脈絡で通ずるという（Algaze 1993: 116-117）。

アルガゼのウルク・ワールド・システムは、ウルク期におけるセトルメント単位の経済的関係に優劣をつけ、段階的に変遷していくウルク・エクスパンションの過程をも包摂する動態モデルとして提示された。

註

- 1) ウォーラースteinの「世界システム」論形成には、プローデルの提唱した地中海世界を軸とする「経済=世界」概念が大きな影響を与えていた。この概念はもともとドイツ語の Weltwirtschaft にあるが、プローデルは「世界経済（économie mondiale）」とせずに、「経済=世界」（économie monde）という新語にして訳した。このプローデルによるフランス語の économie monde はウォーラースteinにより world-economy と英訳され、さら

に日本語ではそれぞれ「経済=世界」と「世界=経済」に訳されている。ひとつの経済の仕組みででき上がっている空間が「経済=世界」あるいは「世界=経済」であり、世界全体に広がる国際経済を示す「世界経済」（world economy あるいは économie mondiale）とはニュアンスがまったく異なる（浜名 1999）。

- 2) ウォーラースteinの「近代世界システム」には、マルクス主義の発展段階論から決別する目的もあったので、これら3つの体系は系譜的にはつながるのではなく、別個に機能するシステムとして設定されている。「ミニシステム」とは閉鎖的な局地経済を示し、物理的規模が小さいため、経済的境界が文化的境界や政治的境界に一致し、歴史的に短命である。「世界帝国」とは「ミニシステム」よりも大規模な空間で、より長期的に持続し、分業システム内部には1つ以上の文化集団が存在し、政治的に統一されている。「世界経済」は「世界帝国」に類似するが、政治的に統一されていない点が決定的に異なる。資本制生産様式を前提とし、そこには中核（core）、辺境（periphery）、半辺境（semi-periphery）が存在する。理論的な分析単位は、文化的単位や国家のような政治的単位を超越した「分業システム」を主旨とする。
- 3) 「インフォーマルな帝国」は、19世紀のイギリスに代表されるように自由貿易による帝国主義、すなわち政治的に直接支配せずとも経済的に植民地を支配する概念を示す（川北編 2001）。
- 4) 本報告では、ウォーラースteinの「世界システム」論とアルガゼの「ウルク・ワールド・システム」論を区別している。また、アルガゼの core と periphery はそれぞれ「中心」と「周辺」に訳し、ウォーラースteinの意図する「中核」と「辺境」から区別している。

引用・参照文献

- Algaze, G. 1989 The Uruk Expansion : Cross-cultural Exchange in Early Mesopotamian Civilization. *Current Anthropology* 30 : 571-608.
- Algaze, G. 1993 *The Uruk World System : The Dynamics of Expansion of Early Mesopotamian Civilization*. Chicago and London, University of Chicago Press.
- Algaze, G. 1996 Fourth Millennium B.C. Trade in Greater Mesopotamia : Did It Include Wine ? In P.E. McGovern, S.J. Fleming and S.H. Katz (eds.), *The Origins and Ancient History of Wine. Food and Nutrition in History and Anthropology Series*, Vol. 11, 89-96. Philadelphia, University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology.
- ウォーラースtein, I. (川北 稔訳) 1981 『近代世界システム I・II—農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』岩波書店。
- ウォーラースtein, I. (川北 稔訳) 1993 『近代世界システム 1600～1750—重商主義と「ヨーロッパ世界経済」の凝集』名古屋大学出版会。
- 宇野隆夫 2000 「世界システム論」安斎正人編『用語解説 現代考古学の方法と理論』II 158-163頁 同成社。
- 川北 稔編 2001 『知の教科書 ウォーラースtein』講談社。
- 田野裕之 2001 「メソポタミアからの視点—ウルク・ワールド・システム—』『日本西アジア考古学会定例研究会発表資料集』2号。
- 浜名優美 1999 「気になる言葉—翻訳ノート3 経済=世界か世界経済か」プローデル, F. (同訳)『藤原セレクション 地中海』3 I-V 頁 藤原書店。